

『貧困の撲滅』

庭野平和財団「南アジアプログラム」10年を振り返って

祈り、

願い、

出会い、

そして
新たな
チャレン
ジへ





はじめに

——本書の願いと内容

このブックレットは、公益財団法人 庭野平和財団（N P F = Niwano Peace Foundation）が実施した南アジアプログラムについて書かれたものです。

南アジアプログラムとは、「貧困の撲滅」をメインテーマに、インド、バングラデシュ、スリランカの3カ国で、地元の人々が立ち上げた現地N G O（Non-Governmental Organization=非政府組織）の活動（プロジェクト）に対し、資金助成を行った事業です。立正佼成会一食平和基金の委託事業として、2004年から2014年までの10年間、実施されました。

本ブックレットは、南アジアプログラムの各事業がどんな考えのもと、どのような仕組みで現地N G Oを支援してきたのか、その概略を記しました。さらに、実際に現地の人々がどのように自分たちのコミュニティの問題に取り組んできたのか。庭野平和財団ではこの10年間、3カ国あわせて29のN G Oの活動を支援してきましたので、そのなかで特徴的なものを数例選び、現地の人々とN G Oスタッフの声とともに紹介しています。人々が抱える問題が南アジアプログラムの出発点ですので、現地で暮らす人々に思いを馳せて読んでいただければ幸いです。

また、この事業全般にわたり貴重な示唆や具体的な指導を下さったアドバイザーと、現地調査や事務作業を担ったスタッフの座談会を記載しました。10年間の活動をふり返ってもらったこの座談会では、すでに国際援助や貧困問題などの活動に携わっている方はもちろんのこと、将来、これらの分野で活躍したいと思っている若い人々に知ってほしいこと、考えてほしいことなどが力強く語られています。

南アジアの田園やスラムの道を、自分の足で一歩一歩踏みしめて歩き、たくましく生きる——。このブックレットを通して、そんな現地の人たちに会いたいと思っていただければ幸いです。







目次 contents

なぜ南アジアなのか ――南アジアプログラムの背景	14
南アジアプログラムの概要（地図）	19
南アジアプログラムのテーマと、「一食を捧げる運動」の精神について	24
「貧困の撲滅」のもとに設けたサブテーマ	26
支援のカギを握った「現地諮問委員会」	28
支援の流れ・諮問委員コメント	33
支援先団体リスト	41
プロジェクト紹介	54
インド（LEADS）	58
受益者の思い、スタッフの思い	68
インド（SMS）	76
受益者の思い、スタッフの思い	86
思い出コラム①（インド編）	94
バングラデシュ（SARA）	98
受益者の思い、スタッフの思い	108
思い出コラム②（バングラデシュ編）	122
スリランカ（UWFWO）	126
受益者の思い、スタッフの思い	132
思い出コラム③（スリランカ編）	140
南アジアプログラム推進団体	142
立正佼成会一食平和基金	142
庭野平和財団	146
アドバイザー組織（シャプラニール）	150
大橋正明教授	152
座談会「現場に足を運び、話し合い、現場で学ぶ」	156
終わりに	174

なぜ南アジアなのか ―南アジアプログラムの背景

対象地域について

南アジアプログラムという事業は、世界の貧困をなくすことを目的として実施された、国際援助活動の取り組みの一つです。

2003年初頭、立正佼成会一食平和基金事務局と庭野平和財団の間で話し合いがもたれ、庭野平和財団に一食平和基金の一部を運用してもらい、貧困にあえぐ世界の人々に手を差し伸べる事業を委託してはどうかという案が出されました。

早速、庭野平和財団で検討が行われ、かねてより交流のあった大橋正明氏（聖心女子大学教授、「シャプラニール＝市民による海外協力の会」元代表理事）に意見を求めました。そして、この事業の目的を明確にするため、一食平和基金の元となっている「一食を捧げる運動」の精神を踏まえ、「貧困の撲滅」をテーマに掲げることになりました。ただ、庭野平和財団には世界中の貧困問題に取り組めるほどの力はないので、「どこかの国や地域に限定したうえで、いかに貧困問題に取り組むべきか」を、次に検討する必要がありました。

世界のなかで生命が危ぶまれるほどに貧困な地域として知られているのは、アフリカ大陸のサハラ砂漠より南に位置する地域です。その一方で、世界で最も多く最貧困層が居住している地域は、アジアのなかの「南アジア地域」と呼ばれる国々です。庭野平和財団の持てる力で「貧しさをなくす」ために何ができるのかを考えたとき、アフリカは日本からはるかに遠く、大きな力を注がなければならなくなると思いました。そこで、アフリカよりもずっと日本に近い南アジア地域なら、貧困救済への道筋を見極めつつ、責任を持って取り組むことができるのではないかと考え、この事業の対象地域を「南アジア」に定めることにしました。

しかしながら南アジア地域はとても広大であり、すべての国を対象として事



業を行うことはできません。そのため、さらに「対象国」を絞る必要ができました。

南アジア地域に位置する国は、インド、バングラデシュ、スリランカ、モルディブ、パキスタン、ネパールがありますが、検討の結果、インド、バングラデシュ、スリランカ、ネパールの4カ国をこの事業の対象国としました。パキスタンを除いた理由は、当時、隣国アフガニスタンでの紛争の影響で国内情勢が不安定であり、貧しい人々が多く暮らす農村部や地方で、私たちが十分に活動を行えない可能性があるかと判断したからです。また、ネパールも当時は国内の政治状況が不安定であったため、対象国としてもよいが、活動を開始するのは情勢が安定した後とすることにしました。そこで当面の対象国を、インド、バングラデシュ、スリランカの3カ国として事業をスタートしました。

特にインドに関しては、国土が広大で、ヨーロッパのすべての国が収まる程の広さです。言語は主要なものでも20以上使用されており、様々な民族と文化が混在しています。そうしたなか、インドの南側には、すでに現地の人々の手で作られた組織により、貧困をなくす取り組みで目覚ましい成果を出している地域もありました。一方、そうした取り組みがあるにも関わらず、依然として貧困に苦しむ地域や州も存在していました。そこでインドでは、通称「ビマール・ステイツ（貧困州）」と呼ばれる、ビハール州、西ベンガル州、オリッサ州、ウッタルプラデーシュ州、マディヤプラデーシュ州、チャッティスガル州、ジャルカンド州の7つの州を対象地域とすることにしました。

WIDE AREA MAP



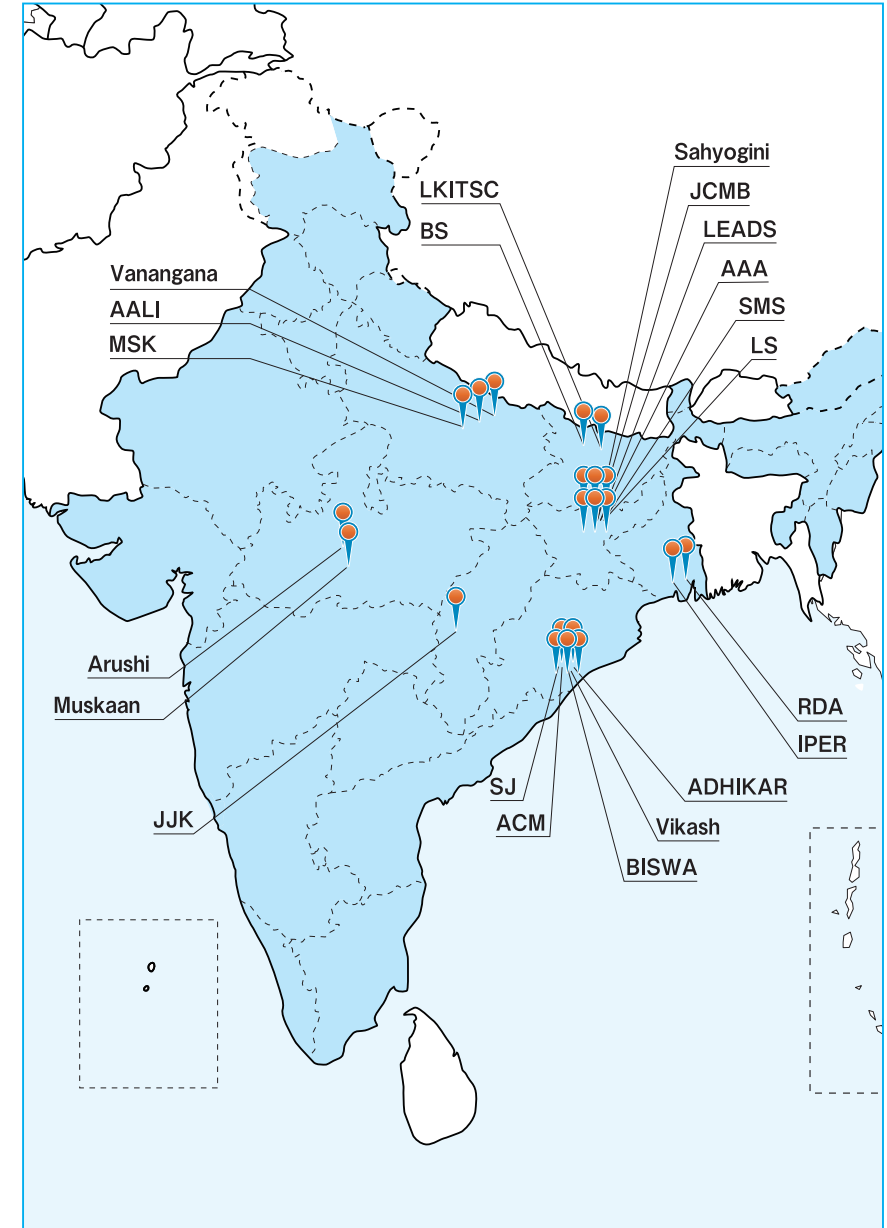
広域地図



INDIA MAP

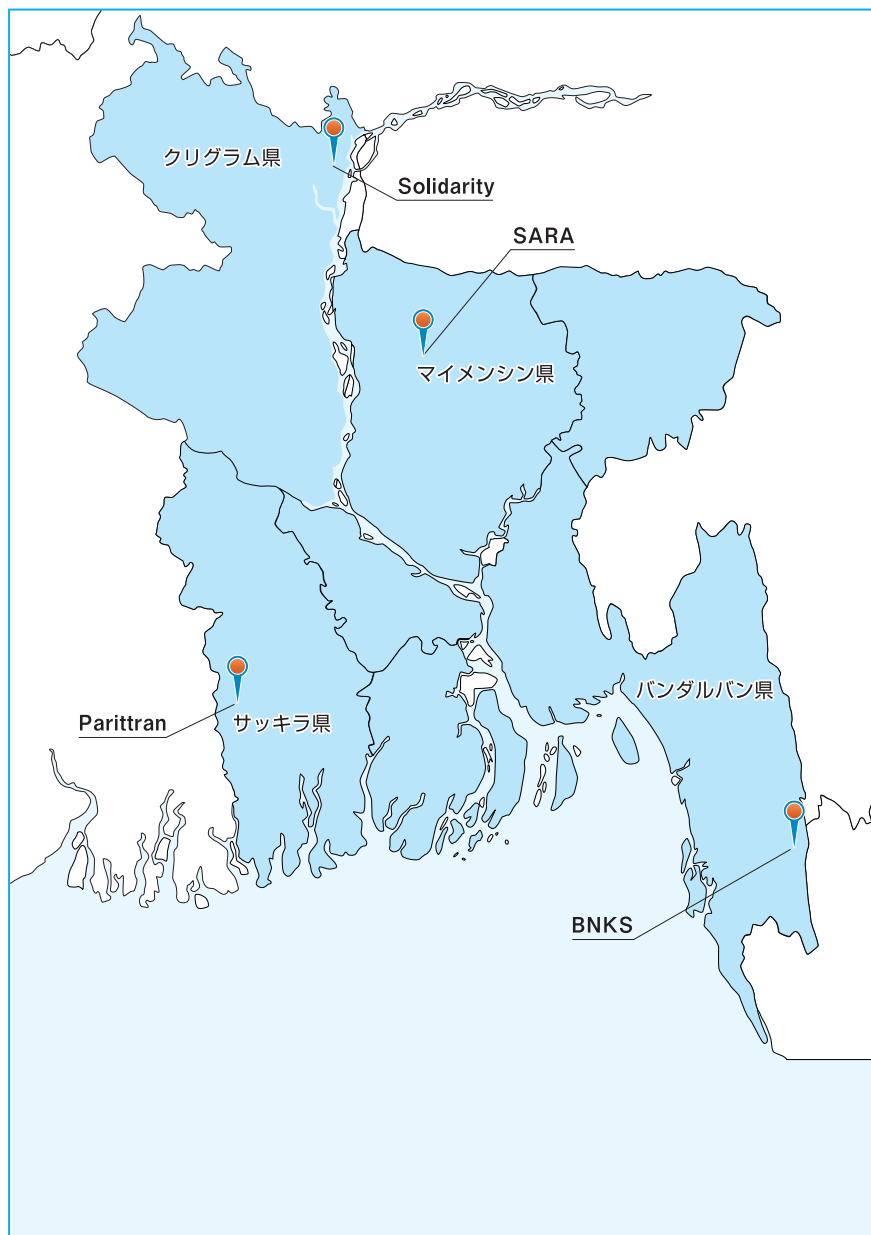


インド地図



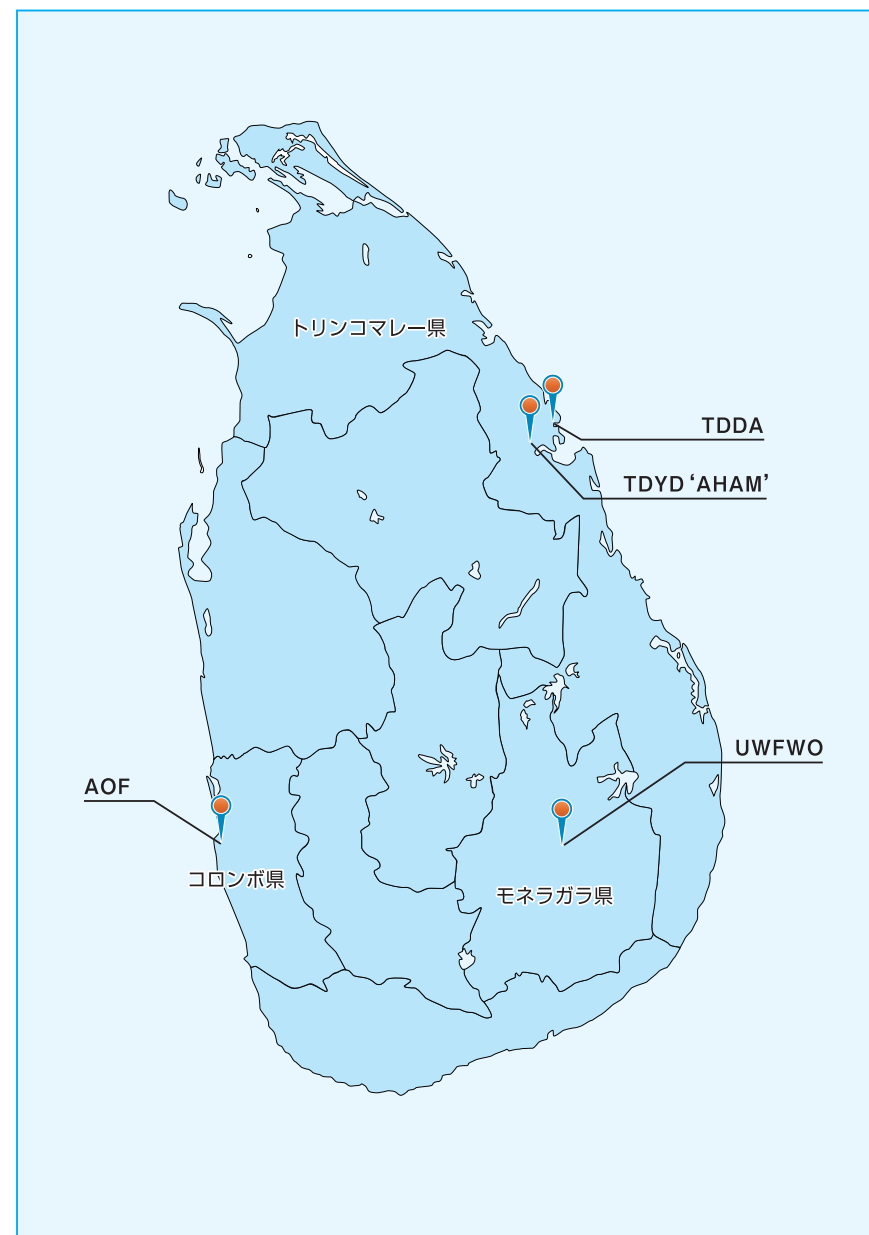
BANGLADESH MAP

バングラデシュ地図



SRI LANKA MAP

スリランカ地図



「貧困の撲滅」のもとに設けたサブテーマ

先にもふれましたが、貧しさは、人々の人生や生活のなかで様々な形となって現れます。またそれらは、国や地域、歴史や文化の違いによって原因が異なり、特徴も違ってきます。

そうした違いのなかで、庭野平和財団が持つ力を考慮しつつ、対象国のなかで起こっている多様な貧困の問題に、より密接に、できる限り多くの問題に応えたいという考えから、「貧困の撲滅」というテーマの下に、より細かな個別のテーマとして、年ごとの「サブテーマ」を決めながら事業を行いました。

以下が、南アジアプログラムでのサブテーマの一覧です。

インド

年度	サブテーマ
2004	食の安全保障 (Food Security)
2005	女性とジェンダー (Women and Gender)
2006	周縁化された人々 (Marginalized Group)
2007	都市における貧困 (Urban Poverty)
2008	自然環境と暮らしー貧困撲滅に向けてー (Environment in relations to Livelihoods towards Poverty Alleviation)
2009	苦悩する子どもたち (Children in Distress)
2010	女性と子どものための食の安全保障 (Food Security Focusing on Disadvantaged Women and Children)
2011	最も貧しい人々のためのエンパワメント (Empowering poorest of the poor)

バングラデシュ

年度	サブテーマ
2005	疎外され不利な立場にある人々のための食の安全保障 (Food security of the marginalized and the disadvantaged)
2007	貧困撲滅に向けての先住民の能力向上 (Capacity Building for* Adibashi [indigenous] peoples towards poverty alleviation) *Adibashi = アディバシ。ベンガル語で先住民の意
2010	疎外され最貧困にあえぐ人々の生活支援 (Alternative livelihood for the 'Unreached')

スリランカ

年度	サブテーマ
2006	紛争による国内避難民と人的資源開発 (IDPs "Internal Displaced Persons" and Human Resource Development)
2009	貧困撲滅に関する2つの問題ー“ トリンコマレー、バティカロアの紛争による国内避難民と帰還民、及びモネラガラ県の周縁化された人々 ” (Poverty alleviation on two separate issues- "Conflict affected IDPs and returnees in Trincomalee or Batticaloa", and "Marginalized people in Moneragala district")

支援のカギを握った「現地諮問委員会」

貧困であるということは、目で見てもすぐにそれが貧困だとわかるものばかりではありません。人々の様子や生活が一見何気ないふつうのものに見えても、実際には本人が気づかずにいる病のように、貧困が奥底に潜んでいたりすることもあるのです。

そのため、貧困を知るには、まず人々の生活にふれ、話を聞くという地道なプロセスが必要となります。しかしそれらを行ってさえも、人々が抱える貧困の極わずかな一部分をやっと理解するだけかもしれません。また、当の本人がそれを貧しさとは考えていないのに、第三者である我々が自分の文化や生活環境、経済状態と比べて彼らを貧困であると決めつけてしまうこともあります。

こうした難しさに加え、国や民族によって特有の文化、社会、あるいは政治情勢などの違いがあり、なおさら理解することが難しくなります。それらの違いにそって、貧しさを考えなければならないからです。

「貧困の現象やその背景の多様さ」また「貧困からの脱却の方法」を的確につかむことは、ときに極めて難しく、それには、まるで医者が患者の病気を診察するときのような、専門的な知識や経験が求められます。

南アジアの貧困について考えるとき、私たち庭野平和財団は、十分な経験や専門的な知識を有していないことを謙虚に認めなくてはなりませんでした。

貧困の背景にあるもの、また、特に南アジア地域での貧困の問題と対応について、それらのことをよく理解しているのは誰なのか。それは、他でもなくその国々で生活する現地の人たちであり、それらの国々で貧困の問題と取り組みについて知識や経験を有している人たちです。そこで、南アジアプログラムの事業では、国ごとに「現地諮問委員会」という3名から5名ほどからなる専門家のグループを作ることにしました。

この現地諮問委員会に求められるのは、高い専門的な知識と豊富な経験を持っていることはもちろん、それに固執せずに、多様な考え方や意見に理解を持っていること、さらには、委員として自分の利益を得ようとせず、支援の対象となるN G Oと庭野平和財団の間で、中立で公平な立場に身をおいて情報を提供していただくことでした。そして何より、貧困に苦しむ人々の心をよく感じ取ることができること、つまり見識と人格に優れた貧困問題の専門家である必要がありました。

南アジアプログラムの事業のなかで、現地諮問委員の役割はとても大きなものでした。3カ国で各国ごとに年に一度か二度開かれた「現地諮問委員会」の会議では、現在の支援活動で発生している問題を、どのような手順で解決していくのかなどについて、委員たちが適切なアドバイスを与えてくれました。

現地諮問委員会は、その国の「どの問題に集中して支援活動を行えばいいのか」を検討する役目も担っていました。南アジアプログラムでは、毎年、現地諮問委員会議でその年の課題を検討し、翌年の取り組み課題を「サブテーマ」として掲げました。この方法をとった理由は、南アジアプログラムが、国や地域によって異なる貧困の問題に対し、できるかぎり対応していきたいと考えたからです。ですから、現地諮問委員会からあげられるアドバイスや注意点が、最も尊重されました。

またこの事業では、「主人公は現地の人々である」という姿勢を方針として貫きました。庭野平和財団が主人公になってしまい、現地の人々やN G Oに対し、独りよがりで不適切な考え方や活動を行うことを避けようとしたのです。現地諮問委員の存在は、私たちの財団がその姿勢を貫く助けをしてくれました。

支援の流れについて -I-

支援先を決定するまで

サブテーマの決定（各国の現地諮問委員会が毎年の会議にて決定）



サブテーマ決定

庭野平和財団が持つ南アジアプログラム用のNGOリストである「**ロングリスト**」からサブテーマに見合うNGOを抽出するほか、現地諮問委員からもNGO情報を収集し、それらの組織内容を確認します。



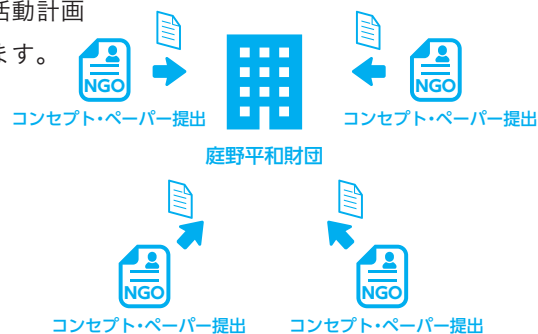
ロングリスト

サブテーマや南アジアプログラムの事業方針に見合うNGOを選び、さらに絞り込んだ候補リストである「**ミドルリスト**」を作成します（15団体ほど）。



ミドルリスト

ミドルリストにあがったNGOに対し、その年のサブテーマを提示した上で、簡単な活動計画を検討・提出してもらいます。この活動計画書を「**コンセプト・ペーパー**」と呼びます。



提出されたコンセプト・ペーパーの内容を分析・検討し、ミドルリストのNGOから、最終候補のNGOを選び、最終候補リストである「**ショート・リスト**」を作成します（およそ5から8団体ほど）。

ショートリストに最終候補としてあがったNGOに、「**詳細な活動計画書**」を提出してもらいます。これを「**フル・プロポーザル（詳細な活動申請書）**」と呼びます。



フル・プロポーザルの分析

最終候補のNGOが提出したフル・プロポーザルを分析し、実際に現地を訪問。各NGOに面会して詳細を聞くほか、その活動が対象とする人々（受益者）が生活する農村やスラムなどを訪れます。現地の人々から直接話を聞くなどの調査を行い、その調査結果を「**現地調査報告書**」にまとめます。調査は1団体につき最低3日間を行います。



現地訪問・聞き取り



現地調査報告書

日本で、国内の人権活動家やジェンダーの専門家、またアジアの宗教について見識のある人などの有識者数名によって構成される委員会の会議にて、最終決定を行います。


この委員会は「**選考委員会**」と呼ばれます。この選考会議は、フル・プロポーザルと庭野平和財団の担当者の現地調査報告書を分析しつつ、最終的な支援団体（支援する活動＝助成案件）を決めるものです。



選考委員会



最終決定



そこには今日も、
今この時も、
人々の生活、
生きる姿があります。

プロジェクト紹介

本プログラムでは事業の対象国であるインド、バングラデシュ、スリランカにおいて総計29のプロジェクトを支援してきました。29の案件。一見その数だけが、あたかも私たちが関わった「数」のように思えるかもしれませんが、しかし、実際には、これら1つ1つの奥に、膨大な人々の姿があります。

集会に参加するために、青空の下に続くあぜ道を、赤ん坊を抱っこして歩いてくる女性。労働の合間に、ひたいの汗を拭いながら話を聞く男性。自分の子どもには何とか教育を受けさせたいと、NGOが行う収入向上プログラムの竹細工の手工芸品作成の訓練を受ける母親。女性にも自らの生活を変えていく力と権利があるのだと、すっと立って言う女性。スラムの小さな学校で、床に座ってエンピツでしきりに書いている子ども。そして、そうした人々が今の境遇を乗り越え、幸せになっていくことを強く心にとめて、来る日も来る日も村々を歩き、人々の話に耳を傾けるNGOのスタッフ。自らのことは意にも介さず、スラムの中に分け入って女性たちを励まし続けるNGO職員。1人1人の、顔、話し声、微笑み。色のかすれたサリー、野菜をいためる音、大切な人の写真、アルミなべ、走り回る子どもの声、赤ん坊の寝息……。私たちから遠く離れて目には見えないようで、しかしそこには今日も、今この時も、人々の生活、生きる姿があります。

南アジアプログラムのなかで、私たちはどのような活動を支援したのか、そして、それらの人々とはどんな人たちなのか、何を語るのか。この章で、あなたもその姿に出会います。

(次ページから、現地で実際に支援活動を行った3カ国の主な団体が、自らの行動計画、調査、記録をもとに、それぞれのプロジェクトを紹介します。また、受益者、スタッフの声を併せて掲載します)



概要

インド

団体名	「勤勉な女性団体」 Shramajivi Mahila Samiti : SMS
本拠地	インド ジャルカンド州ジャムセッドプール市
支援期間	2010年4月～2013年3月 【この年度のインドのサブテーマ】 女性と子どものための食の安全保障 (Food Security Focusing on Disadvantaged Women and Children)
プロジェクト名	ジャルカンド州西シンブーム県の困窮するシングル・ウーマン(単身女性)とその子どもたちのための食の安全保障 (Food Security for Single Destitute Women and Their Children in West Singhbhum, Jharkhand)

支援団体SMSについて

1. 団体の歴史・特徴

80年代の半ば、ジャルカンド州の学校で経済とベンガル語の教師をしていたプラビ・ポウル（SMSの創設者）は、彼女の住むジャルカンド州でダム建設のために村や家を立ち退かされ、追われていく人々に触れるうち、そうした人々のために何かしたい、と強く考えるようになった。プラビは教師を辞め「（女性のための）勤勉による発展」というNGOにスタッフとして入り、この地域の貧しい女性のために働いた。その後1995年に独立し、自身で「勤勉な女性団体」（Shramajivi Mahila Samiti [SMS]）を立ち上げた。SMSはこの年に社会福祉組織として政府に登録をし、そこからNGOとしての活動を始めた。

SMSはこの約18年の間、ジャルカンド州において、目まぐるしく変化する女性たちの生きざまについて理解を深め続けてきた。SMSはこれらの経験を重ねつつ、ジェンダーについて様々な活動が行える、あるいは拠り所となる「場」をつくること、また極めて貧しい状態、あるいは問題を抱えている状態の未亡人、離婚や別居により独り身で家族を支える女性、あるいは未婚の中高年の女性、これらSMSがシングル・ウーマンと呼ぶ女性たちの声を引きだし、彼女たちの権利をいかに実現させるかを模索し、取り組み続けている。

2. 役員・スタッフ

SMSの役員は7名。そのうち2～3名は指定カースト、及び指定部族。スタッフは常勤スタッフが11名、種々の事業を行うための現場スタッフ（各プロジェクトのためだけに雇用される）が40名である。スタッフにも指定先住民や指定カーストの者が多く含まれている。

受益者への インタビュー

パドマ プールティ
(Padma Purti)

助け合えば、ちゃんとした生活
を送ることができるんですね。

PROFILE

名 前：パドマ プールティ (Padma Purti)
性 別：女性
年 齢：45歳（推定）とのこと。これは、インドの農村地帯では出生届の概念が浸透していなかったため、多くの人々が自分の正確な年齢を把握していないことによる。
住 所：ジャルカンド州ウエストシンブーム県バラジュリ村
家族構成：夫は8年前に肝炎のため死亡。（推定で享年46）
子どもは2人で、長男（14）は学校の7年生。次男（10）は5年生。

※ プールティさんは13歳で夫と結婚。夫は指定部族（Schedule Caste・先住民）の出身だったので、本当は結婚は認められていなかった（※法律上の規制ではない。異なるカースト間での結婚は文化・慣習的に認められないケースが多い）ため、夫の家族から反対され、結婚後も嫌がらせを受けていたという。

——受益者になる前はどんな状態でしたか

2006年に夫が死んでからは、夫の家族から嫌がらせが増すようになりました。夫の家族から「子どもはうちで預かる。お前は家から出ていけ」と、何度も言われました。加えて、村のなかで「あいつは魔女だ」と言われるようになり、村の人たちからも差別や嫌がらせを受けるようになったんです。（インドでは夫を失った女性を魔女扱いし、ひどい差別行為を行う場合があります。これが「魔女狩り」と言われる暴力になってあらわれることもある）

その後、夫の家族から家や土地の権利もとられてしまい、幼い息子たちには、満足にご飯を食べさせることもできなくなりました。そこで、私は二人の息子をつれて村を出ましたが、結局住むところもなく、路上で寝起きする生活を送るようになりました。たった一つ、何とかお金を得られる方法は、森に入って行って薪を拾い、近くの市場に売ることだけでした。

——支援を受けるまでの過程をお話してください

2008年になって、SMSが様々な地域で活動を行っていることを知りました。そして、SMSが関わっているシングル・ウーマンのエンパワーメントグループ（ENSS）の活動に参加するようになりました。ここでSMSのスタッフから、貧しい未亡人は政府から支援をもらえる権利があることを教えてもらったんです。SMSの行政への働きかけで、この年から未亡人手当や子ども手当をもらえるようになりました。その後、2010年からSMSをとおりて私たちのENSSグループにも、庭野平和財団から支援をもらえるようになりました。



向こうは
「自分は何もない」と思っているんです。
でも、本当はそうじゃない。

ナビン

く幸せな面もいっぱいあるんですよね。そういうふうに教えたり、逆に、日本にこそ貧困の面があったりするので、それを頭に入れながら支援していくと、もっとわかってくると思うんです。「ドナー」という考え方とか、お金の ある人から無い人にあげなさいという考えは、昔からあまり好きじゃなかったのが気をつけていました。けれど、これからは、それも頭に入れながら活動しよう、そうするとまた違う面も見えるだろうと思います。「村の生活だって楽しいじゃないか」。そう言わないと、向こうは「自分は何もない」と思っているんです。でも、本当はそうじゃない。そういうことに気をつけてほしいと思います。

大 橋：援助者は、相手が貧乏だということを相手に教える人だとよく言われます。物事って比較するからこそ初めてわかるわけです。だから、外部の人がお金を持って、支援をしてくれるから、「俺たちはもらえる存在なのだ」ということ、貧乏だということを、彼らはドナーから習うことになるんですよ。それは、世界では「援助」とか「開発」と言われていて、その国のリーダーも、村のリーダーも、政治家も言うから、村人たちは「俺たち貧しいのかな」と思うようになる。援助って一方ではすごく罪つくり。しかしだからといって、僕は援助をやらなくていいというわけじゃなくて、援助はやるべきなんです。だからこそ、「よりよい援助をどうすればいいか」ということに尽きるんです。

私たちがやろうとした南アジアプログラムの中身がそうですね。「住民の組織化をなるべくやろうじゃないか」「エンパワーメントをやるじゃないか」って。物をあげるのではなく、なるべく彼らが自分たちでやっていく……。それができたかどうかは別にしても、当事者が自分たちの力をつけていくようなやり方でやっていくことを目指したわけですね。

仲 野：私は、この10年間を通して、まず、足を使って相手の所に行くということ、体を動かしてそこまで行くことを強調したいですね。よくわからなくても、面と向かって話を一生懸命聞くと、ところから学ぶことが多かったのも、やはり足を使って、まずよく聞きに行く。そして相手の立場とか、生活状況もあるでしょうが、先ほどナビンさんが言っていたように、水を飲むぐらいのつもりというか、ここの紅茶、さっきハエがいっぱい入っていたなと思っても、飲むふりをしてでも、相手を知るためにどうするかということは大事だと思います。わからないところは専門家とか、よく知っている人に聞きながら考えていくことも必要。やっぱり僕らにとって良かったのは、大橋先生やナビンさん、諮問委員会など、わからないことをアドバイスしてくださる方々がいたので、できたのだと思うのです。

■反響があった「一食運動」とスーパーボール

仲 野：私は「一食を捧げる運動」のことは必ず行った先で、村の人とか、誰に会っても、説明したんですね。大橋先生もナビンさんも、必ず説明してくださった。それを聞いた人々からは「そんなすばらしい行為をたくさんの人がやっている。それはすばらしい」と言ってくださいました。だけど、ふと「一食運動」をしている側の人たちのことを思うと、実は、一食を抜いて募金をした先のことはあまり考えてないんですね。行為自体は終わっているのに、その先募金が使用されたあとに、役に立たなかったからお金を返せとか、そういうことはない。結局、

祈り、願い、出会い、そしてあらたなチャレンジへ 『貧困の撲滅』庭野平和財団「南アジアプログラム」10年を振り返って

発行日：2017年5月

発 行： 公益財団法人
庭野平和財団
NIWANO PEACE FOUNDATION

住 所：〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-16-9 シャンヴィラカテリーナ 5F

T E L : 03-3226-4371 F A X : 03-3226-1835

E-mail : info@npf.or.jp

U R L : <http://www.npf.or.jp/>

編集協力：株式会社 佼成出版社

本ブックレットの製作にあたっては立正佼成会一食平和基金からのご寄付を頂きました。

自分の足で一歩一歩踏みしめて歩き、
たくましく生きる――。



公益財団法人

庭野平和財団

NIWANO PEACE FOUNDATION

〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-16-9 シャンヴィラカテリーナ 5F
Tel: 03-3226-4371 Fax: 03-3226-1835